富士宮囃子：喧嘩囃子の真髄と系譜

伝統、誇り、そして先人たちが守り抜いた音

出典：井上歳丸・村上喜已・有賀敏治
各氏の回顧録による考察

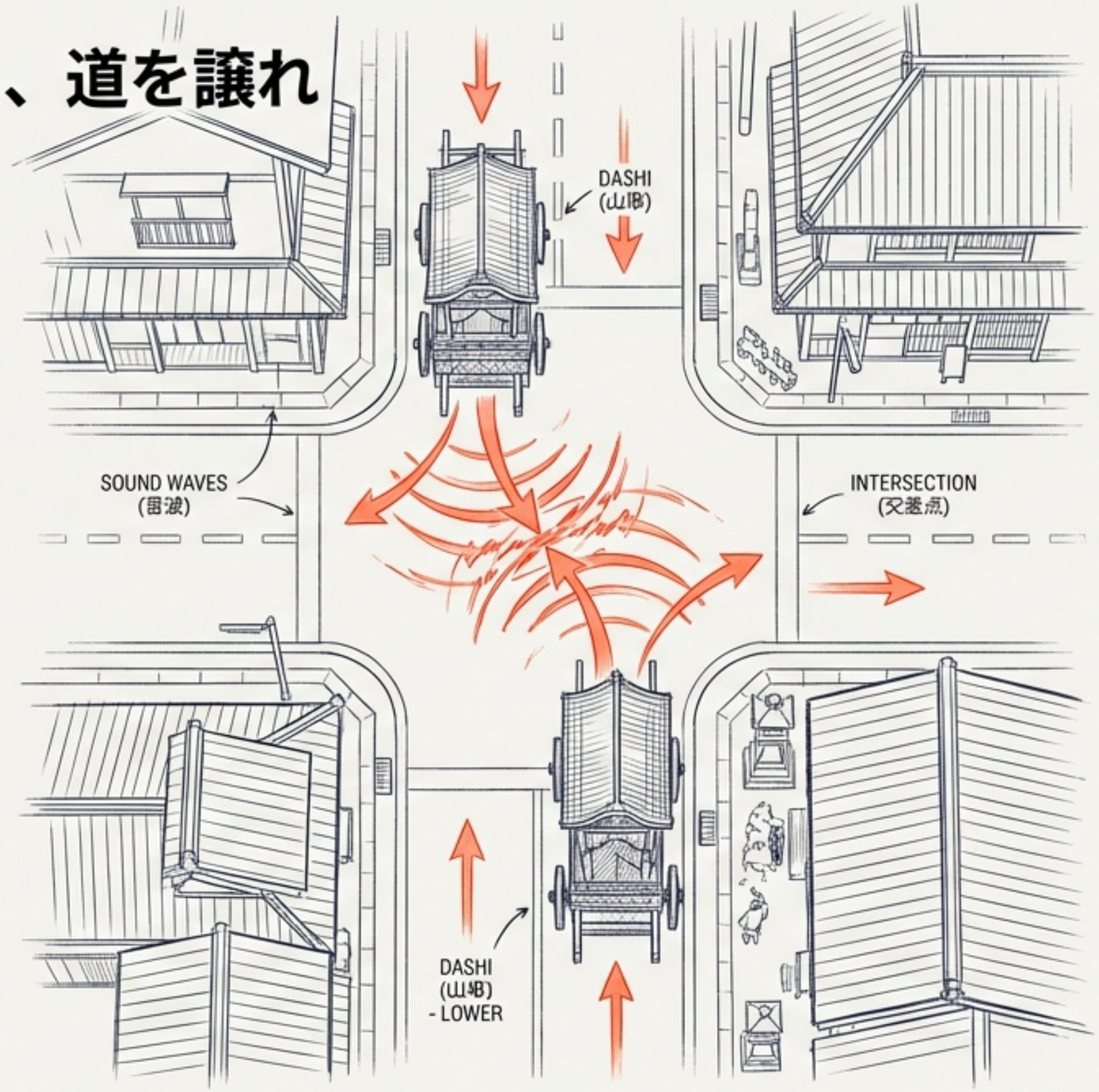
NotebookLM

競り合いの掟：リズムが乱れたら、道を譲れ

「大宮ばやし」の真骨頂は山車同士が対峙する「競り合い（セリ合）」にある。
これは単なる演奏ではない。相手のリズムを崩し、優劣を決するための「喧嘩囃子」である。

- 掟：囃子の調子を乱した方が負けとなり、道を譲らなければならない。
- 空気感：祭酒に酔い、意気上がった男たちが技を競う「疾風怒濤」の時代。

「あの威勢のいい『ヤタイ』はこのセリ合によって磨かれて来たのです」—— 井上歳丸



NotebookLM

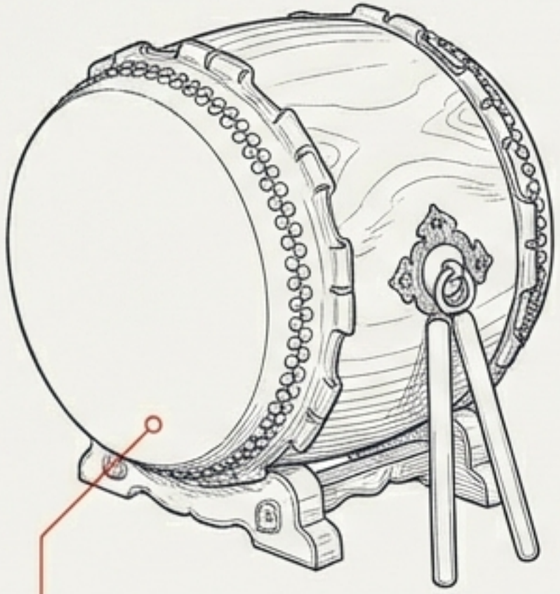
楽器ではない、「道具」である

囃子方はこれらを楽器とは呼ばず、職人が使う「道具」と呼ぶ。
それぞれが厳格な役割を持つ5人編成の戦闘単位（ユニット）である。

Fue (笛)
指揮者であり、錦上花を添える千両役者。

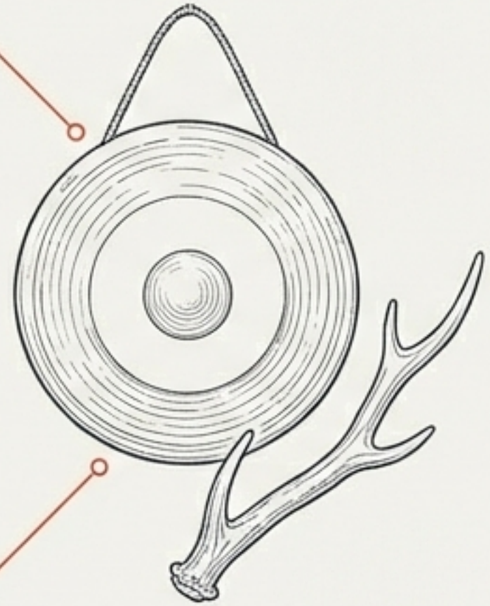
Fue (笛)
指揮者であり、錦上花を添える千両役者。

Kindou (金胴)
譜面に手を入れることは許されない、正確無比なエンジン。



Odo (大胴)
低音の引き立て役。
金胴を「喰って」はいけない。

Kane (鐘)
鹿の角のバチで「擦る」ように奏でるペースメーカー。



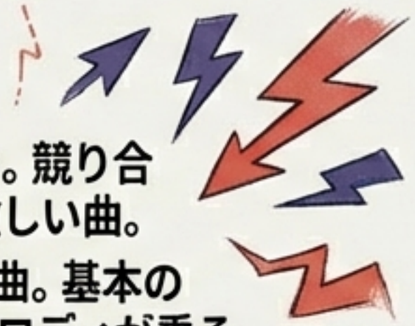
Kane (鐘)
鹿の角のバチで「擦る」ように奏でるペースメーカー。

NotebookLM

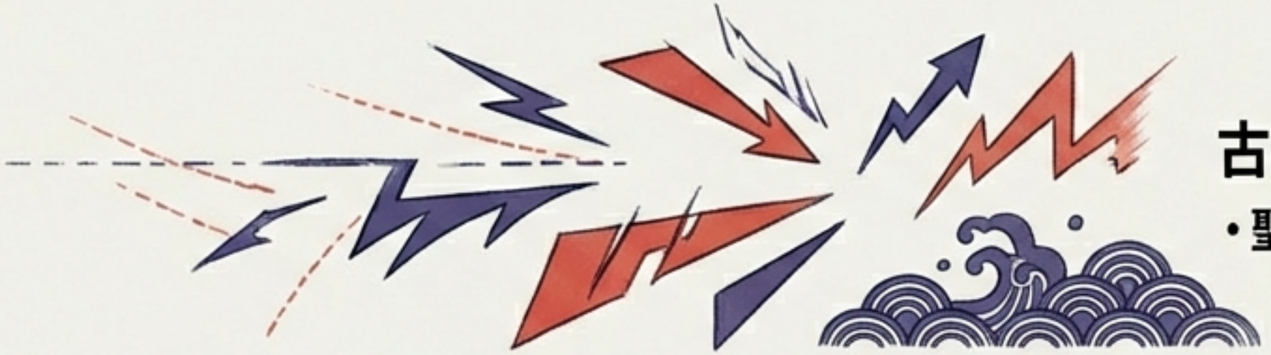
旋律の機能と分類

演奏される曲は、その場の状況に応じて
厳密に使い分けられる。

山車・競り合い (The Core)



- 屋台 (Yatai)：いわゆる「喧嘩囃子」。競り合いのクライマックスで演奏される激しい曲。
- にくずし (Nikuzushi)：進行・行進曲。基本のリズムに対し、変幻自在な笛のメロディが乗る。



古典・導入 (The Classics)

- 聖天 (Shoden) / 四丁目：屋台囃子の格調高い導入部。

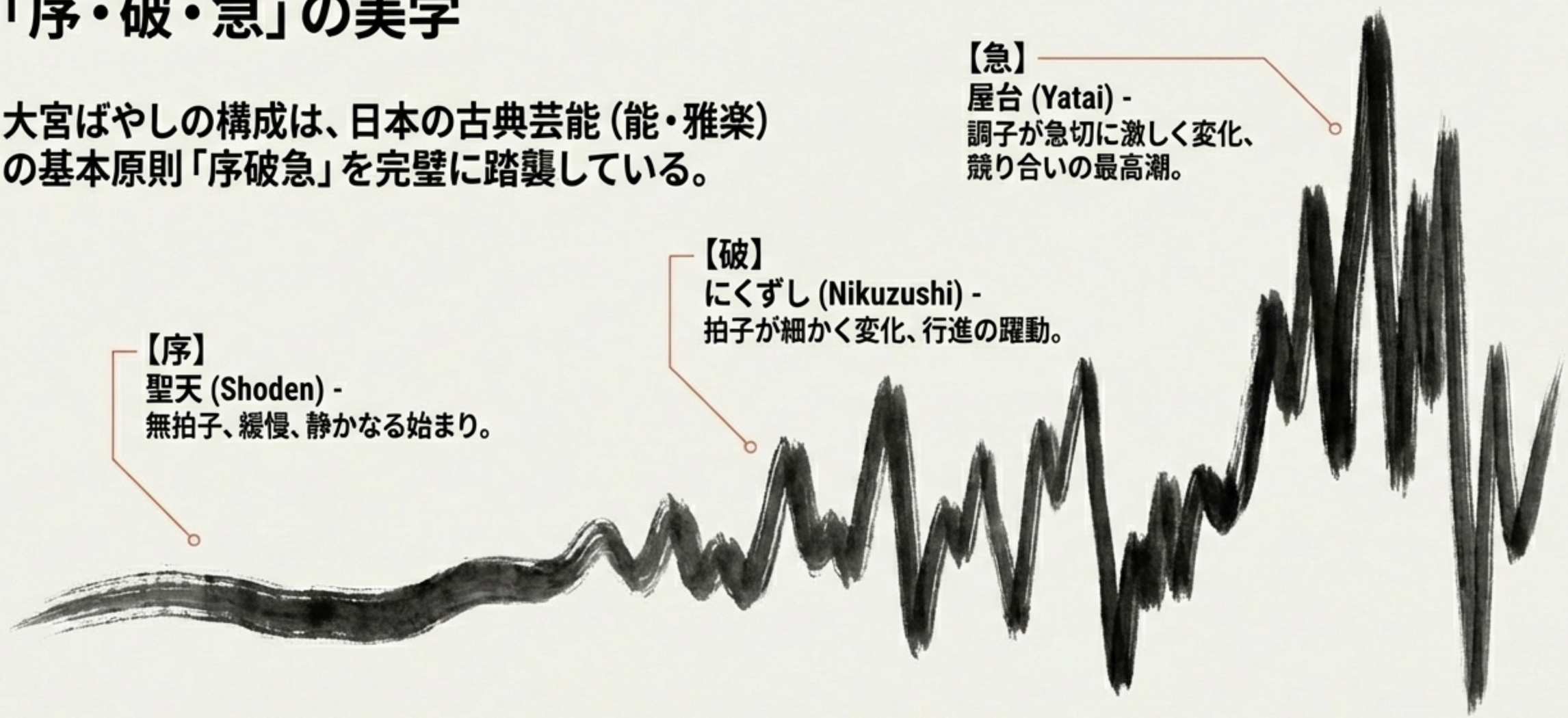
道中 (Walking Music)

- 道ばやし：竹雀、篭毬など。
座って打つものではなく、歩行のための音楽。

NotebookLM

「序・破・急」の美学

大宮ばやしの構成は、日本の古典芸能（能・雅楽）の基本原則「序破急」を完璧に踏襲している。



単なる民俗音楽ではなく、計算され尽くした劇的な構成美を持つ。

NotebookLM

「田舎蕎麦に鯛の潮汁はいらない」

伝統と純粋性への執着

昭和の観光化に伴い、派手な演出や他ジャンルの混入が試みられたが、古老たちは「純粋な郷土芸芸能」の汚染を強く危惧した。

- 三味線の拒絶：「大宮ばやしに三味線は入らない」。 寄席の下座音楽の導入を否定。
- 日本舞踊の拒絶：後付けの振り付けは、素朴な味わいを殺す。

「純粋な泥臭さ、素朴な野暮臭さこそが郷土芸能の魅力である」── 村上喜已

NotebookLM

妙技「切り替え」の瞬間

「にくずし」から「屋台」へ。曲から曲へ移る瞬間こそが、この囃子の技術的頂点である。

1. ノンストップ：三島囃子のような「小休止」を挟まない。
2. 笛の合図：笛の一吹きで、絶え間なくリズムが変貌する。
3. コネクト（接続）：この滑らかな移行こそが、無形文化財としての価値を決定づける。

「にくずし」から「屋台」へ。曲から曲へ移る瞬間こそが の囃子の技術的頂点でる。

NotebookLM

笛の系譜：即興が生む「冴え」

笛の旋律は固定されたものではなく、
奏者の個性（アドリブ）によって進化してきた。

「冴え（Sae）」：基本譜に対し、その人独自の美しい装飾音や手を入れること。
これが地元の音を作った。

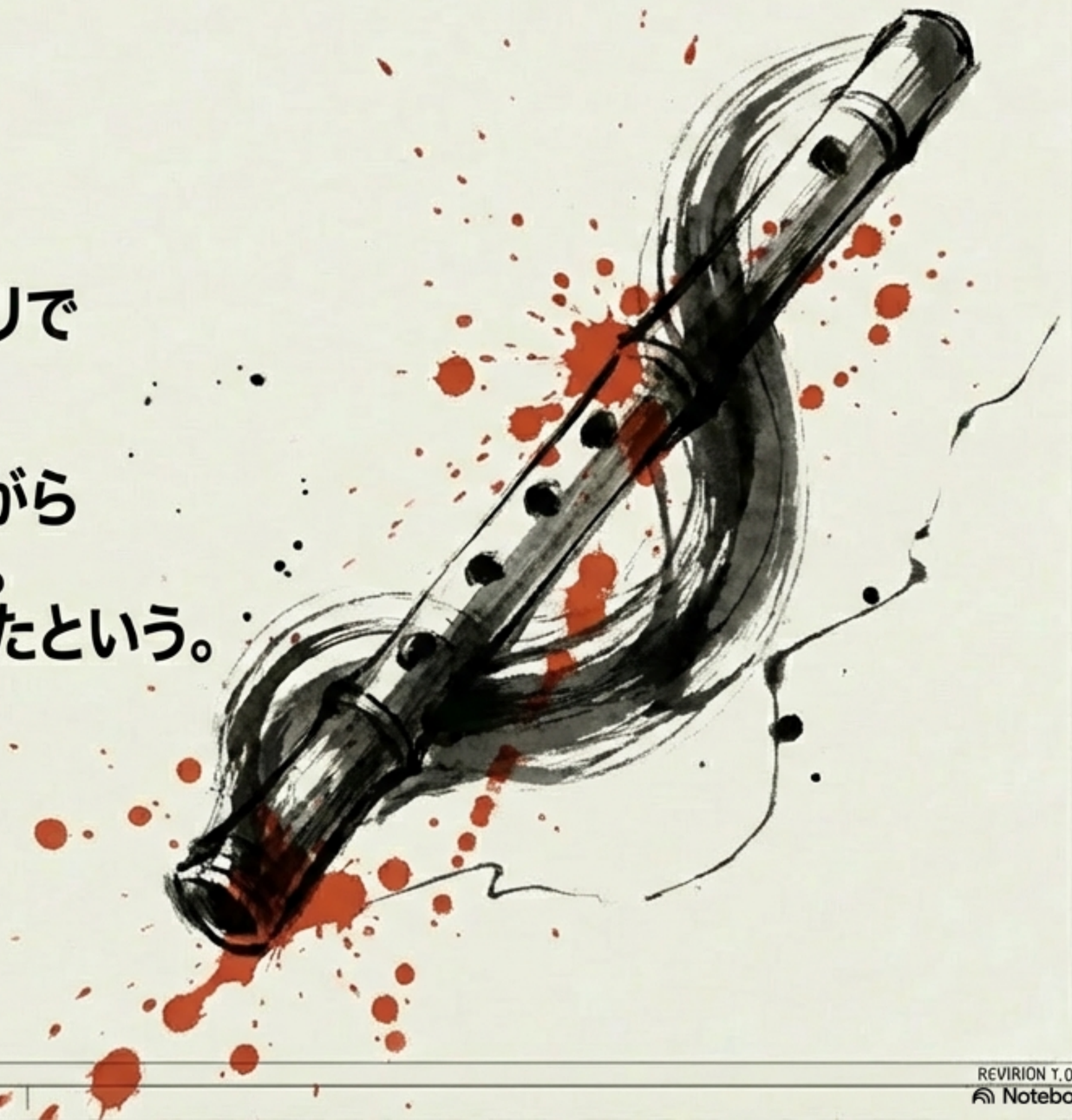
NotebookLM

伝説：血染めの笛

明治末期、沼津の笛の名人「根古市」が
大宮の祭りに呼ばれた際、
かつて競り合いで負かした相手にカミソリで
唇を切り裂かれた。

翌日、彼は包帯を巻き、血を飛沫かせながら
山車に乗り込み、執念で笛を吹き切った。
その鬼気迫る姿に、加害者は腰を抜かしたという。

祭りは単なる楽しみではなく、
命がけの誇りのぶつかり合いだった。



NotebookLM

神田川原の対峙

ある年の祭り、神田地区と西町（立宿）の間で喧嘩が発生。神田川を挟んで若衆が対峙した。

「通すわけにはいかない」と道を塞ぐ西町に対し、神田組は引き下がらず、晩秋の寒空の下、Noraoshi川原で焚き火（のろし）を上げて朝まで睨み合った。

警察が介入するほどの騒ぎになることも珍しくなかった、当時の祭りの熱気。

NotebookLM

1979年、露店が消えた日

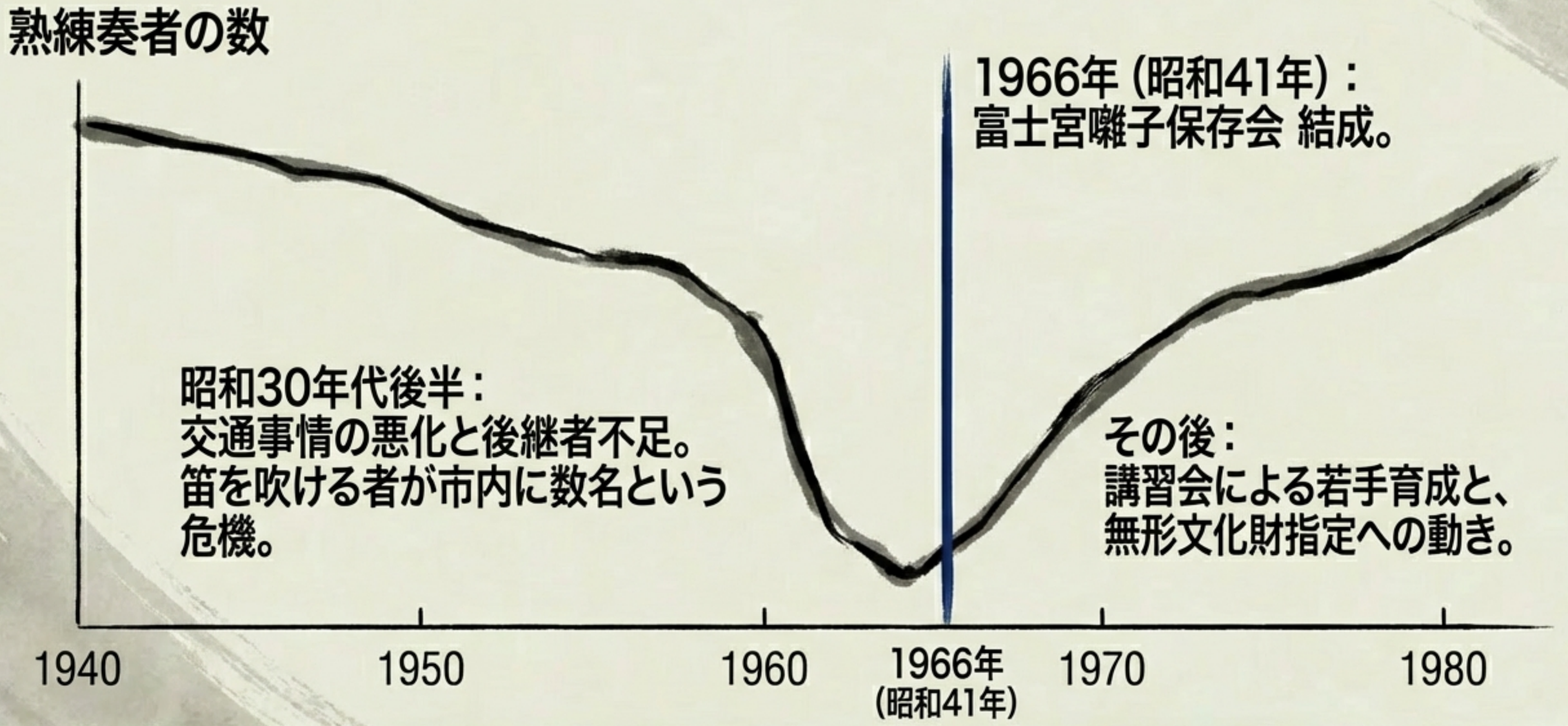
テキ屋と暴力団の抗争により、
浅間大社境内から一切の露店が
排除された特異な年。

Observation
子供たちは失望したが、山車の
運行は通常通り行われた。
静まり返った境内に、囃子の
音だけが響き渡る。

それは皮肉にも、
商業主義が排除された
最も「純粋」な祭りの姿であった。

NotebookLM

存続の危機と保存会の結成



NotebookLM

譜面ではなく、身体で覚える

昔は「見て盗め」の世界だったが、
現在は組織的に指導が行われている。

☑「耳で聞くのではなく、体で聞け」(若林英雄)

☑「笛吹きは地区に永く住む者でなければならない」(有賀敏治)
— 技術だけでなく、地域への責任感を継承する。

NotebookLM

個性と伝統の狭間で

【有賀敏治の願い】
「笛吹きの皆様、どうぞそれぞれ
個性を伸ばしてほしい」

自分だけの「曲」を作曲し、
アドリブを入れる自由さを守る。

【村上喜已の願い】
「安易な観光化や現代的アレンジに流されない」
「古くより伝わる型」を純粋に守り抜く。

この二つの願い（革新と保存）のバランスこそが、富士宮囃子の未来である。

NotebookLM

富士宮囃子の未来へ
江戸の粋、地元の武骨な精神、そして技術的な洗練。
その音は、単なる伴奏ではない。富士の麓で生きる人々の、血と誇りの記憶である。

NotebookLM